

意味付与の体系としての景観

ジェームス・S.ダンカン*
(西部 均** 訳)

Duncan, James S. 1990.
Landscape as a signifying system.
*In The city as text: the politics of landscape interpretation
in the Kandyan Kingdom*, pp. 11-24 (Chap.2).
Cambridge: Cambridge University Press

理論への敵意がいつも表しているのは、誰かの理論への反対と自らの理論への忘却である。(Eagleton, 1983, viii)

コンテキストに配慮した世界概念化

アメリカ文化地理学の古くからの縄張りである景観研究は、イギリスや合衆国、それ以外の所でも、数多くの歴史家、景観設計家、ジャーナリストたちが論じ詰めてきた課題でもある。しかしながら、数少ない注目すべき例外があるものの、こうした研究者たちは、景観やその社会的過程における役割について、私には潜在的にもっとも挑発的で挑戦的な論点だと感じられるものを正面から捉えようとする関心も理論的精緻化も欠いていた。伝統的に景観は、それが築かれた文化を反映するものとして、あるいは過去の出来事、とりわけ伝播という事象に手がかりを与える工作物の「足跡」のようなものとして認識されてきたが、それが文化の再生産や改変という社会-政治的諸過程を構成する要素として認識されるのは実に稀なことではなかった。他稿(Duncan, 1980)で私は、文化地理学者たちが「文化の内的な仕組み」(Wagner and Mikesell, 1962, 5)と表現さ

れてきた問題にうまく対処できなかったことを分析した。皮肉にも文化にほとんど関心のない文化地理学者たちが、工作物にばかり目配りしていた。長年にわたって数十篇もの雑誌論文が、家屋の諸類型、納屋の諸類型、柵といった工作物の地域的分布——そして時折伝播——という論題や、文化地域もしくは文化の火床 culture hearths のありかを明かすものだと主張される景観の「調和的総体」という論題にささげられてきた。

おそらく彼らが、物体を物神崇拜し、歴史的な復元に魅了され、客観性の保証となる無媒介の観察が可能であると信じていたために、地理学者たちはおおかた自らの研究手法を観察と古文書研究に限定してきたのである。聞き取りができるところでやってみたり、意識についてデータを集めるその他の手段を試みたりすることはめったになかった。例外があるとしても、景観の意味への問いは通例その研究者自身の視点から取り組まれるだけである。解釈を保証する権威は、単に「その景観においてその場で表れ出てくる」ものと、知識を有する学者のフィールドや古文書を駆使するスタミナとの無媒介の関係から得られるものと思われる。この見方では、研究者自身の「コンテキストに配慮した世界概念化」

* ケンブリッジ大学地理学教授

** 龍谷大学非常勤講師

(Butler, 1984, 7) の問題を説明に組み込むことがどうしてもできないわけである。

時には、もっと創造性豊かな試みも見ることが出来る。そのような場合には、私的でそれゆえユニークな解釈が提供され続けているとか、その研究者はいかなる明解に組み立てられた方法論をも適用しないような芸術家的創作の一形態に従事しているとか、幻想的な現象学的本質が探し求められているとか言われる。

比較的最近まで、イギリスやアメリカの地理学における景観解釈は、ドミニク・ラカブラ (LaCapra, 1983, 5) が学術調査の「重厚な」部門と呼んできたもの、すなわち哲学や文学理論の自己言及的な学問分野から隔離されてきた。[景観解釈の] 熟練者たちは、社会科学や人文科学におけるもろもろの発展に対して、すなわち文化的過程や表象の性質に関して、レヴィ=ストロース、デリダ、フーコーのどの著作にでもいやがうえにも述べられているだろうことに対して、景観解釈者がそのような奥義のごとく難解な討論にかかわらなくてもよいという口実で無関心であり続けてきたのである。むしろ、文化地理学者たちは、人間の地球表面の利用に反映された文化的価値体系や出来事の年代記をよりよく理解したいと望む人々たちに対して、わかりやすい言語で景観を描写することのできる鋭敏で見識ある観察者として振る舞ってきた。彼らの学者観は、十分な歴史学の訓練によって武装して世界に乗り出していき、そこに何があるのか記録する人間である。この見方は、外部の諸形態や表面上の現れをおおむね疑うことのないある種の経験主義に基づいている。おのおのの工作物は、データとして、つまり所与の客体として観察され記録される。観察に基づくデータは、それが調査者によって直接記録されたものであれ、古文書から復原されたものであれ、理論的論述とは区別される。理論的論述は、抽象的で仮想的なものとみなされ、またそれゆえに世界の描写ではないとみなされるからである。この事実と理論との分割には強力な反理論のバイアスが存在していて、不幸にして、諸事実は理論として中立であるとするこの常識的な見方もまた批判能力に欠けている。

描写とは鏡の写像ではない。なぜなら、それは描写する人の言語や知的枠組みの範囲内で組み立てら

れるしかないものだからである。そうした言語は、「向こうにある」現実と一対一対応をする単語セットではない。それはいくつかの言説——すなわち社会的に構成された共有の意味、イデオロギー、「常識」をなす一式の想定——を拠り所とするものなのである。同じ単語が別の言説のなかでは別の意味をもつかも知れない。描写とはそのようにコンテキストと結びついた場合にのみ意味をもち得るのである。したがって、あらゆる描写は、それが明示的に理論的であろうとなかろうと、言語に依存し、すなわち、命名するというまさにその行為に内在するある様式のカテゴリー化に立脚しているのである。そして、カテゴリー化とは必ず理論的なものである。それゆえ、理論的想定は、それが意識的に捉えられ明示される場合もそうでない場合も、避けて通ることのできないものである。キャサリン・ベルジー (Belsey, 1980, 4) が言うように、理論の「機微」を気につけないということは、「自らの前提条件に直面することを回避し、現在支配的な手続きや手法がどんなものであってもそれをかばい、そうして客観性のまるで反対のことを、つまり問題視されない想定 of 永続化を保証する」ものである。

さらに、現実感があり原因となる力をもつもの全てが観察され経験されるわけではない。したがって、理論的実体を、つまり観察できない実体を仮定するという意味で明示的に理論化しようとする考えに抵抗を示すことは、通例、社会現象に影響を及ぼすもつとも興味深く強力な要因の多くを必要もないのに考慮の外に締め出してしまふ、自らにひどく制約を課すたぐいの経験主義に囚われていることの表れである。

それでもなお、景観解釈は私たちを学際的な知的アリーナの中心に導き、そこで学者たちは、客体化・表象・意識・イデオロギーの性質、そして一つの文化的体系が有するこうした諸相の関係性のような重要な争点に取り組んでいる。一見、こうした問題は一部の文化地理学者にとっては聞き慣れないものと思われるかも知れない。実際、それらは自家製の論点、私たち自身の学問分野の産物ではない。それらは、人類学、文学・美術批評、心理学、政治科学のようなさまざまな知的系統が交わって受精し生み出された交配種なのである。それにもかかわらず、こ

うした問題は、景観の生産と利用や、景観の社会的諸過程を構成する要素としての役割を地理学的に理解するうえで中核となるものだと、私は論じているのだ。それらはまた、景観に関心をもつ文化地理学者と他の学術研究者とが対話を始めるうえで有益である。それというのも、文学理論や文化人類学の言語はもはや景観解釈者の耳に聞き慣れないものではなく、また景観解釈は大きく拡張されたテキスト概念を採用してきた文学理論家や文化人類学者にとって無関係とは言えなくなったからである。

そのような景観解釈の研究法は、三つの重要な点で伝統的なアメリカ文化地理学からの脱却を表している。第一に、それは景観が社会的・文化的諸過程において果たす役割を強調する。第二に、こうした過程に対する関心のおかげで、社会的・文化的過程における物体の役割を研究している社会・人文諸科学の他分野研究者との対話が実現している。第三に、理論的負荷性や解釈学的循環、社会科学の説明における常識的社会知の役割、データの地位というさら一般的な問題が、景観を解釈する際に重要な争点となっている。

景観自体が映し出すもの

文化地理学者は長い間、視覚に特権を与えてきた。カール・サウアーのもとで創始されて以来、〔文化地理学という〕下位分野は、フィールドワークを称揚し、私たちは観察によって世界を理解できるという信念を大切に温めてきた。この点で文化地理学は、クリフォードとマーカス（Clifford and Marcus, 1986）が『文化を書く』と題された著書においてアメリカ文化人類学の「實在論的民族誌」と名づけたものと対応関係にある。文化地理学はまた実証主義科学哲学と視覚の特権化を共有している。それというのも、そのどちらもが理論中立的・非文化的・非イデオロギー的だとされる観察論述を真実に対する主張の基盤としているからである。

文化地理学者はミシェル・フーコー（Foucault, 1970, 251）の次の陳述を考慮に入れば得るところが大きいだろう。すなわち、「可視的な秩序は、その恒久的な区別のグリッドとともに、今や奈落のうえに懸かる表層のきらめきに過ぎないのである」。ここ

で問題となるのは、「可視的な秩序」が知的に意義をもつかどうかという点ではない。それというのも、フーコーはそれはその通りだと言って、伝統的な文化地理学者たちに同意するだろうからである。問題は、私たちはその可視的な秩序をどのように考えるのか、視覚の特権化を文化地理学の実践の中核と考える必要があるのか、20世紀のとりわけヨーロッパにおける社会・人文科学の一層興味深い文献の一部を特徴づけてきた反眼球主義 *anti-ocularism* が提示する挑戦に対して、その立場からどのように答えることができるのかという点にある。思想史学者のマーティン・ジェイは、フーコーのような思想家の反眼球的なポジションをまとめて次のように書く。すなわち、「「見える」ものとは、無垢な眼にも直接使える所与の客観的現実ではなく、視覚的に同等に言語的に構築された認識論的領域である」（Jay, 1986, 182）。同じ脈絡で、美術評論家の W.J.T. ミッチェル（Mitchell, 1986, 38）は、「無垢な眼は盲目である」、なぜなら世界は私たちの表象体系を身にまとっているからだと論じる。私たちは現実に対して決して無媒介に接近できなくても無垢に観察できなくても落胆しなくてよいのである。世界の相関的な性質を理解するためには、私たちは不可視的なくさんの部分に「書き入れる」必要がある、つまり可視的なテキストの背後に存在する言外の意味を読み取る必要がある。このようなテキストやサブテキストの意味は、時代とともに、かつまた解釈者の視角の変化とともに移り変わる。あるテキストの意味を知りたければ、私たちはそのテキストが一部をなす全体を予め想定しておかなければならない。例えば、私たちは19世紀初頭の出来事を20世紀後期の理論的カテゴリーを駆使して分析する場合もあるだろう。その時、そうした理論的カテゴリーはその場所と時代の「分厚い記述 *thick description*」に基づくべきであり、またこうした個性記述的な細部を踏まえて洗練されるべきであるにしても、それらはまたその比較的特質を活かして外部の観察者が備えるべき批判的な距離を保持しなければならない。

文化地理学者たちは視覚の特権化し、それゆえデータに対して疑問を差し挟まない姿勢をとってきたけれども、その一方で、構造主義とポスト構造主義の社会科学や文芸批評は言語的なものを特権化し、

それゆえにまたデータと理論との関係を問題化することを拒絶してきた。したがって、シニフィアンとシニフィエとの不安定な関係（そこでのシニフィエは概念であって現実の指示物ではない）に焦点が絞られたけれども、その一方で、認識論のもろもろの争点、つまりデータの理論負荷性なのか概念の有効性なのか、理論なのか説明なのかといった問題がおおかた無視されてきた。ここにこそ、現代の文化地理学者たちが挑戦すべき途方もなく大きな課題が存在する。それというのも、ある景観がそれ自体の解釈のコンテクストまで十全に決定するものではないと論じるにしても、また同等に、極端な相対主義におちいる危険性も存在すると論じることができるからである。私は文化地理学の伝統と一定の距離を置こうとしてきたけれども、その伝統から地に足のつかない観念論には我慢がならない性向を引き継いでいる。もろもろの観念は地上で生まれ、それらは決まって生物的・社会的・政治的に生き残るという切迫した世俗の必要性のために混濁しているのである。ここでの私の立場は経験主義と理論主義の中道を行くものであり、そこでは私たちの「コンテクストに配慮した世界概念化」と景観「自体が映し出すもの」がお互いに直面することになる。

意味付与の体系としての文化

レイモンド・ウィリアムズ (Williams, 1982, 13) によれば、文化とは「意味付与の体系 signifying system」であり、必然的に（他にもいくつか手段があるけれど）それを通じてある社会秩序が伝達され、再生産され、経験され、探索される。彼は、文化的実践や文化的生産は「単に別の方法で構成された社会秩序から派生したものではなく、それら自体が社会秩序を構成する主要要素である」と主張する (Williams, 1982, 12-13)。さらに彼は、文化を「現実化した意味付与の体系」と呼んでその物質的・実践的性質を強調する (Williams, 1982, 207)。彼はそれを政治的もしくは経済的体系のような他の種類の社会組織と区別し、またもっと特殊な記号の体系と区別する一方で、意味付与の体系として、文化を他の諸体系のなかにその一つの構成要素として組み込む。地理学者の景観への関心とかかわる例えとし

て、ウィリアムズは住居を引き合いに出す。彼が言うには、住居とはおもに避難所という基本的必要を満たすものである。しかしながら、このことを越えて、ある特定社会のコンテクストのなかでは、住居は特定の親族関係や家族系統を意味し、さらには内的なもろもろの社会的差異化を意味することになる (Williams, 1982, 211)。彼は、圧倒的多数の事例では避難所としての機能が基本である一方で、宮殿やある種のカントリー・ハウスのようないくつかの事例では、意味付与の機能が本来の基本的な機能を凌駕していると言う。

意味付与の体系としての文化は他のあらゆる社会体系の内部に存在し、またそれ自体のうちに他のあらゆる体系を顕現させるというこの見方は、有益な区別を保持すると同時に、ウィリアムズ (Williams, 1982, 209) が、「理論や実践において「生活の経済的側面・政治的側面・私的側面・精神的側面・余暇の側面」などと決めてかかる、資本主義秩序のなかで歴史的に発展した分け隔てて分析する習慣」と呼ぶものを回避する効果をもつ。そのような定義のもう一つの利点は、この見方が文化の（ある構造化された記号の体系としての）組織的な性質と時間的に動的で相争われ再確認される何かとしての過程的な性質とを、双方ともに強調することである。

ウィリアムズの観点とたいへんよく適合するのは、文化や文化的生産に対する新しい学際的研究法であり、それはこれら意味付与の体系としてだけでなく複数の読み方に委ねられるいくつかのテキストとしてもみならず刺激的な研究法である。こうした研究法を採るいくつかの文献もまた、ある種の読み方が他のものよりヘゲモニーを有し、そこには常に解釈のポリティクスが存在するだろうと認めている。この観点の提唱者には、人類学ではマーカスとカシュマン (Marcus and Cushman, 1982)、クリフォードとマーカス (Clifford and Marcus, 1986)、ギアーツ (Geertz, 1980) が、歴史学ではダーントン (Darnton, 1984)、ストック (Stock, 1983; 1984; 1986)、ラカブラ (LaCapra, 1983) が、社会学ではブラウン (Brown, 1987) が、考古学ではホッダー (Hodder, 1986) が、文学理論ではサイド (Said, 1983) とフィッシュ (Fish, 1980) が、記号論ではエコ (Eco, 1986) とバルト (Barthes, 1979a, b) が、

美術評論ではミッチェル (Mitchell, 1980; 1986) が、哲学ではリクール (Ricoeur, 1974) が含まれる。

もっと大きな、幅広く共有された文化圏域のうちにあるのが、さまざまな制度に関心を寄せ集める言説領域 *discursive field* である。ここで言説領域という用語が指し示すのは、ある特定分野の社会的諸実践に関係する一組の物語 *narrative*・概念・イデオロギーから構成されるいくつかの言説が競合する範囲のことである。例えば、法曹・医療・宗教の範囲内に言説領域が存在すると言えるだろう。言説領域もまた、王政のような社会の内部では、それを編制する中心的諸概念をめぐって立ち現れるようであり、その事実は目下の研究において明確に考慮に入れている。こうした諸言説のあるものがヘゲモニーをとり、その他のものが異議申し立てに回る。競合する言説が、いくらか互いを認めたい、あるいは容易に融合できない状況にあるままで共存する、安定した言説上の秩序が存在するかもしれない。ある社会において政治的に重要な諸階級もしくは他の利益集団は、いずれもヘゲモニーを有する観点に対してまったくの無批判でないにしても協力的だと思われる。さもなければ、別々の言説に基づいて仮定を立てたいくつかの集団が、公然と相争っても容認される状況があるのかもしれない。

さらにまた、諸言説はあらゆる実践を伝え、取り決め、疑うための、分かりやすさの社会的枠組みであると定義されることもある。このような諸言説は、そのなかではある種の考え方や振る舞い方が自然なものに思われ、その言説のなかで考えることを身につけてきた大半の人たちにとって容易に脱却して越え出ることのできない制約や限界であるとともに、彼らに遂行力を与える機知や手だてでもある。

「言説」や「言説領域」という用語はミシェル・フーコー (Foucault, 1967; 1970) やルイ・アルチュセール (Althusser, 1971) の著作にもっとも密接に関連づけられてきたけれども、私の立場としては、これらの用語が含みつつさらに決定論的でさらに構造論的な意味合いを、つまりおのおのの主体が自律した言説によって「生産された」存在であって、彼らはそれにより自分が行為主体なのだという「幻想」を心のうちに作り出されているのだとする考え方を回避しようと努めてきた。

言説に関する文献によると、イデオロギーは言説のなかには書き込まれている、すなわちイデオロギーは言語そのもののなかにも、そして言説の物語構造のなかにもともと備わっているのである。権力諸関係もまた、その結果、言説に書き込まれている。ヘゲモニーを有する言説は討論の用語を限定することができるが、こうした用語は外部からの攻撃を受けやすいと思われる。ここで改めて私は、言説を歴史の断絶や不連続によって外部から切り離されたものとして、外部と同じ基準で計れないものとして、あるいは外部からは難攻不落のものとしてみなすという点で「強力な」言説の定義を支持しないと表明する。フーコー (Foucault, 1967; 1970) が論じてきたように、それぞれの単語は異なる言説のうちでは異なる意味をもつかもされないが、私は言説間での翻訳が不可能であるとは思わないし、異なる言説の用語を支持する人々同士の衝突を確かに解決できる可能性を拒否したりしない。もちろん私は、言説の差異が現実の和解しがたい物質的利益に基づくものであり、したがって解決はしばしば不正な権力闘争の結果もたらされるものであり、そのなかで一つの集団がその「声」を喪失するのだということを認めるものである。

意味付与の体系としての景観

私は景観を文化的体系の中心的要素の一つであると論じようと思う。それというのも、物体の秩序立った集合体、つまりテキストとして、景観は意味付与の体系として作用し、それを通じてある社会体系が伝達され、再生産され、経験され、探索されるからである。景観のこの構造化されたまた構造化する性質を理解するために、第一に、私たちは景観によって意味されるものを究明しなければならない。これを景観の意味作用 *signification* と呼ぶ。第二に、私たちはこの意味作用が生起する仕方を検討しなければならない。これを景観の修辭法と呼ぶ。まず、景観の意味作用について手短かに考察してみよう。

ここでの調査には三つの方針が考えられる。第一の方針は、ある景観の性格に関して地元民の説明を検討するものである。すなわち、彼らにはそれがどのように見えるのか (ロラン・バルトの「南西部の

光」(Barthes, 1987)に暗示されるような単純な問いでは決してない),彼らはその景観にどのような重要性を認めているのか、彼らの景観の読み方が一つの社会における社会的諸関係を自然化もしくは改変する解釈のポリティクスにどのように貢献するのかを検討する。

ここで解釈学の問題が生じる。それは、ある景観を生産、再生産、あるいは改変する人たちにとってそれが何を意味するのかを、調査者が解釈することを意味している。解釈学の問題構制のなかでは、学術研究者が彼または彼女の解釈に加える歴史的・文化的・知能的な準拠枠が存在することと、それが歴史の調査において必ず果たすことになる一定の役割があることが認められている。そこではまた、「常識的な」信念や価値や説明が真剣に取り扱われる。アンソニー・ギデنز(Giddens, 1976, 316)が述べてきたように、これらは「人間活動にとって付加的なものではなく、不可欠なものなのだ」。続けて彼は、「素人の信念とは社会的世界の描写ではなく、人間のさまざまな行為の整理された所産として、その世界を構成するためのまさに基礎となるものである」と言う。

与えられた景観の性質と重要性に関して地元で得られる説明は、一般的な文化的言説領域のなかに位置づけられ、またそれによって構造化されているけれども、どうかすると、集団内あるいは集団間ではっきりとした差異が見られる。その言説領域の境界内には、いつも対立が生じる余地がある。そのような言説的な余地、あるいはド・セルトー(De Certeau, 1985)の用語を用いるなら「開口部 openings」が、景観の意味作用を研究するうえでもっとも実り豊かな分野の一つであることが分かるだろう。

私の「言説」や「構造化された説明」という用語の使い方から分かるように、私は地元民の説明を額面通りに受け入れることに素直に賛成しているわけではない。それというのも、もろもろの行動の原因や集合的に達成された構造的な諸状況の原因が行為者の理性によって尽くされることなどあり得ないからだ。そこには常に意図しない承認されていない行動の諸条件が存在しているはずである。

私はまた、学術研究者が訓練を通じてあるいは文化的・歴史的背景の違いから発揮することのできる

距離感が、こうした承認されていない原因となる諸条件を確定するために有益であると論じようと思う。もちろん、これは皮肉を言う立場であり、外部者の見方であり、社会学的な視角である。したがって、地元民の視角は、ある解釈学的な解釈が形づくられるための重要な素材を提供する。文化地理学者の仕事は、どのようにして地元民の説明が意味作用の体系のなかで構成され、どのようにして社会秩序のなかで生産された文化的体系においてそれが他の要素と結びつくのか明示することにある。

景観の意味作用を調査する第二の方針は、非地元民の説明である。ここで関心は、外部者が景観を解釈するために基づく言説と内部者のそれとの差異にある。改めて言うならば、地元では当然視され自然なこととされる見方を、外部者は別の視角のなかで捉えることのできるある種の批判的な距離を身につけていると思われる。普通、景観はそのなかに住まい働く人たちにとって自然なものあるいは避けがたいものと映る傾向にある。以下で考察を深めようと思う例外的状況にある場合を除いて、景観特性の確実さや見かけの透明性のために、地元で景観を見る人は、それを編成することで可能になるはずの社会的・政治的・経済的諸関係が自然にさらには神によって定められたものと納得してしまう傾向にあるようだ。外部者と内部者の読み方を並置することで、景観と支配的イデオロギーと政治的・社会的実践との関係性がうまい具合に異化される可能性がある。また、それによって、景観を媒体にして伝達される支配的イデオロギーが社会的・政治的実践を再生産する方法を解明できる可能性がある。

調査の第三の方針は、景観それ自体の根底にある意味作用の体系を文化地理学者が解釈することに関係するものである。改めて言うならば、外部者としての調査者が解釈に加える距離感によって、一つの文化的体系に属するさまざまな要素の関係性を見渡すことが可能になる。ここでの重要な着目点は、景観がその文化的体系の他の分野に存在している意味作用の記号体系を再生産する方法にある。例えば、本研究では、スリランカ社会の宗教と政治のテキストが中心的な重要性をもっている。問うことのできる論点の一つは、記号体系が文芸形態から図像形態に受け渡されるときに、それがどのように変化する

のかという点である。

本研究において中心となる着目点は、景観が権力との関係性を意味する方法にある。ギアーツ (Geertz, 1973, 448) が表現するように、景観は「[人々が]自分たちに向けて自分たちについて語る…ストーリー」である。キャンディー王国の事例では、景観は王の権力にまつわる寓喩的物語であり、つまり彼の権力が神やいにしえの英雄王の権力といかに空間的に時間的に接続しているかを語るものである。

景観の修辞法

ここで、景観の内部に意味作用が生じるメカニズムについて考察に入ろう。景観の修辞法の問題は興味深い。なぜならそれは、テキストとしての景観が解読されて社会秩序を再生産する伝達装置として作用する過程について、いくつもの論点を提起するからである。ここでもまた、豊かな実りをもたらすであろういくつかの調査方針を示すことができる。第一の方針は、客体化の効果、すなわち巧妙に少しずつ教え込むための有形の視覚的な伝達手段として景観が示す有効性を検討するものである。第二の方針は、景観のなかに発見することのできる比喩的語法を検討するものである。この比喩的語法を通じて情報が記号化され伝達されたときに、読み手はヘゲモニーを有する諸言説を適正で自然で正統なものであるとすっきり思い込んだり、そうはならなかったりする。

「思想史における方法とイデオロギー」と題された論文のなかで、ヘイドン・ホワイト (White, 1982, 300) は、「テキストの形態とはそれがイデオロギー的に有意義な働きをなす場である」と論じた。もし私たちが、イデオロギーの主要目的の一つが、メアリー・ルイーザ・プラット (Pratt, 1986, 140) が「還元的正常化」と呼んだもの、すなわち主体と客体の双方を固定され成文化され具象化されたものに見せかけ、明らかに文化的なものをあたかも自然なものであるかのように見せかける企てであると認めるならば、一段と優れた客体化能力をもつ景観はイデオロギーのなかで重要な役割を演じるはずである。

ピアース・ルイス (Lewis, 1979, 12) が景観は「私たちの意識しない自伝」であると言うとき、私は彼

に同意することを認める。しかしながら、彼は私たちが自らの文化の過去について知識を欠いていることや工作物の遺跡を解読できないことを嘆くけれども、私は彼の陳述からさらなる洞察を引き出そうと思う。この忘却、この「文化的記憶喪失」のためにこそ、景観がそれほどまでに強力なイデオロギーの道具として作用することが可能になるのである。日常のこと、当然のこと、客観的なもの、自然なものの一部になることで、景観はその形態や内容の狡猾さやイデオロギー的性質を覆い隠す。その社会的構築物としての歴史が検討されることがない。そのために、景観は意識されずに書かれるのと同様、意識されずに読まれるのである。

ここで景観の修辞法における第二の要素、すなわち景観が記号体系として作用できるようにする比喩的語法の性質を考察しよう。こうした比喩的語法が一番手は寓喩である。この見方によれば、景観はただ単に(郊外の住宅開発は労働者が自らを再生産できる環境を提供するといった)あからさまで世俗的な機能的要求を満たすわけではなく、またただ単に(ニューイングランドで生まれニューヨークへと伝わった住宅様式や納屋の型式に見られるような)局地的な文化の創造を表しているわけでもない。むしろ、さまざまな慣習的形式——記号、象徴、図像、そして景観に特化された比喩的語法——の語彙を使って、人々、なかでも権力をもつ人々は、自らについて、自らの共同体における社会的諸関係について、そして神聖な秩序と自らの関係について、道徳性を帯びたストーリーを語る。

本研究で考察される景観における隠喩のほとんどが、人間の世界に現実的な関係をもつ実在世界と考えられていた神々の世界の物語に対応するものである。そのような景観は、より高度な秩序をもつ景観を具象化して表すものだという点で寓喩的であると論じることができる。キャンディーの都市と神々の都市との構造的類似性は、キャンディーがその寓喩的表象のもつ力を帯びるために創り出された。通例、これは広く浸透している秩序が正常であり正統であるという感覚を市民のうちに繰り返し教え込むうえで有効な方法であり続けたかもしれないが、常にそうとは限らなかった。

キャンディーの社会では、他の多くの社会でと同

じく、人々は寓喩的に考えるように教えられ、景観に対しても寓喩的に解釈する手法がしばしば適用されたと考えるのが無難だろう。しかしながら、王国の民衆が景観を寓喩的に解釈したとしても、それは必ずしも王が神々の王である帝釈天 Sakra をほのめかすモチーフの形で景観に「書き込んできた」寓喩と同じ言葉によるものではないということを、私は以下で示そうと思う。ジェイムソンによる寓喩の定義はこの点を見事に説明している。彼が言うには、「寓喩とは、数多くの位相として、また数多くの補足的位相として生じる、複数の意味や逐次的な書き直しや上書きに、この場でテキストを開放するものである」(Jameson, 1981, 29)。

もう一つの重要な比喩的語法が提喩、すなわち全体を表すために部分を用いたり、部分を表すために全体を用いる比喩である。提喩は強力なシニフィアンである。なぜなら、それは極度に儉約しながら観察者の心のうちに全体の物語を出現させるからである。そのような隠喩は、修辭的实践として景観を操作するうえで根本的なものである。したがって、どのようにして景観が意思伝達の体系として作用するのか理解するために私たちに課せられた主要な仕事の一つは、その提喩を探り出すことである。ヘイドン・ホワイト(White, 1978, 73)は、「大宇宙的な全体を表す小宇宙として細部を理解できるという信念を正当化する性質をもっていた」提喩のおかげで、明らかに関係のない細部が全体へと統合されても容認されてしまうのだと論じる。この提喩による緊張はキャンディーにおいてははっきりと表れていて、もろもろの提喩は天上にある神々の都市まるごとを模型として地上に組み立てるための部品である。例えば、キャンディーにおける湖を取り囲んでなだらかにうねる波形の壁は、天地創造の時に神々が神話上の乳海を攪拌したという複雑な物語全体を表すシニフィアンとなる。この物語は、王の人格と財貨から魔術的に流れ出すと考えられていた創造のエネルギーに対する寓喩である。その物語の複雑さは、その都市の建築による構成のなかでそっくりまとめて再現できるものではなく、提喩を用いて効果的に暗示されるものである。

換喩とは、一つの単語や一つの図像が隣接性によって他の何かと結びつくことでそれを表す、もう一

つの比喩的關係である。換喩のもっともよく知られている事例は命名に關係するものであり、すなわち、対象が連辭的に連なってできた全体の一部の名称が、この連鎖の表す概念に言及するために利用される場合である。例えば、王冠は君主もしくは君主の権力に言及する象徴的な対象全一式のうちの一要素である。合衆国で「ホワイトハウス」に言及すれば、それは直ちに大統領職、行政機関、合衆国政府の権力に言及したものと認識される。エコ(Eco, 1986, 90)が提出した換喩の事例は、発祥の地が原型的な対象に言及するために使われ、原因が結果を表すために使われ、容器が内容を、道具が操作を、紋章が象徴された対象を表すために使われる場面である。

キャンディーにおける換喩の事例は王に与えられた称号であった。公的書簡で彼はしばしば「大門」として言及された。ここでは彼の宮殿の大門が王を表すものとして使われた。しかしながら、宮殿の大門は敷居となる部分であって、人間の世界と神々の世界との間の通過地点であると考えられていた。このように空間が並置されることで、権力が天空から地上へと流れてくるために必要な隣接性の換喩的關係が改めて確認されたのである。大門はまた世界の中心にある須弥山しゆみせんを表すものであり、その上には神々の都市が置かれていると考えられていた。したがって、王を「大門」と称する換喩を通じて、完全にはこの世界でなく神々の世界でもない宮殿にいる、完全には人間でなく完全には神でもない敷居にある人物だという彼の自称が伝達されたのである。

この独特の換喩の事例はまた、もちろん提喩や直喩の事例としても役に立つ。それというのも、大門が中央の須弥山上にある「神々の世界」の物語全体を表す一要素であったが、しかしそれは神聖な世界と同じ秩序をもつものではなく、ただその世界に似ているに過ぎず、「あたかもそうであるかのような」模型を地上に創り出したからである。直喩の面白い点は、それが主張をなし、討論や論争の対象となり得ることである。言いかえれば、解釈者たちは、神聖な権力の模型や寓喩としての都市の形態とテキストとしてその模型の言及するものとの關係性が妥当なのか、またそれがどのような意味をもつのかという点に関して、相反する見方を保持することができたのである。

思い浮かぶ第三の比喩的語法は、反復性の物語構造をもつものである。この比喩的語法は、王が雇った都市建設者によって、メッセージを最高の条件で確実に受け取ることができるように戦略的に設計された反復の体系から構成されている。バクサンドール (Baxandall, 1972) が指摘するように、そのような比喩的語法は、15世紀イタリアで宗教心から生まれた美術や建築に数多く見られた。当時のその地では、牧師、画家、建築家がお互いを反復し合う関係にあった。

文化的信念を景観の可視的なモチーフに変換することによって、それまで内面的な考えであったものが、そしてそれゆえ考えの内面化を形成し統制し強化するようにそそのかすものが、外在化される。これまで見てきたような比喩的語法——間違いなく他にもたくさんあるのだが——を介してこそ、景観はそのイデオロギー的な働きを十分に発揮するのである。

テキスト性と間テキスト性

テキスト性と間テキスト性の概念は、有力なテキストを伝統的にもっている社会ならどこでも、その景観研究に使うことができる。そのような社会では、偉大なテキストをいかに解釈するか統制し、社会の過去を記述することでその文化的アイデンティティを明確に定める責任を負う人たちに、権威が授けられる。フーコー (Foucault, 1975) や他の幾人か (Baker, 1985; Hobsbawm and Ranger, 1983; Stock, 1989 を参照) が、記憶や過去の表象は重要な政治的資源であると論じてきた。フーコー (Foucault, 1975, 25-26) は以下のように書いている。すなわち、「誰かが人々の記憶を統制し、彼らの活力を統制しているとすれば、記憶は実際のところ…闘争に際して極めて重要な要素であるということだ。…このような記憶の所有権をもち、それを統制し、管理し、そこに何が入るべきか述べることは重大なことなのである」。ペーカー (Baker, 1985, 135) は論点を政治的論争に移し、そのことが「政治的・社会的言説のさまざまな可能性を動員し統制しようと相争う努力や、そうした言説を拡張し、作り直し、そして——時として——徹底的な変革さえやり抜こ

うとする努力となって現れるのだ」と言う。伝統とは、社会的・政治的・宗教的な、さまざまな目的のために選択的に維持されるか創作されるかするものである。ストック (Stock, 1989) によれば、重要なのはそうした伝統が「過去に属していて、過去に始まり現在へと至る社会発展の物語の一部であると感知される」ことである。過去は現在に影響し、現在を決定するとさえ考えられていると、彼は論じる。彼はまた、過去の表象が、「逆らいがたい一体感を過去の経験に付与する」ことで、多様さや複雑さを最小限に抑えようとする事実を指摘している。

キャンディーの社会は、高度にテキストに依拠している。それはストックが「聖典社会」として言及してきたものである。彼が言うには、そうした社会はどこでも、「書くという行為が欠落し、抑圧され、承認されないときでさえ、書かれたものの卓越性が承認され、真実は神聖なる書物から生まれるものだ」(Stock, 1988, 200) という了解を事実として共有している。例えば、歴史的にキャンディー社会の構成員たちが宗教的伝統の守護者として神から認定されていると主張し、王がこのことに関して主要な責任を負うのは当然のことと思われたのは、一連の宗教的・歴史的・政治的テキストに準拠してのことである。仏陀の教えや神々の世界や王にふさわしい行動について語るこうしたテキストは、王国にあっては重要な参照元であった。

貴族の一員である統治者・王・官僚と(仏教聖職者集団である)サンガ sangha によってさまざまな度合いで統制されていた口述的・視覚的・記述的媒体が、伝統を伝えていくために用いられた。ストックは伝統伝達における地理的次元の重要性を指摘したが、キャンディーの事例では、これがおおむね王の指揮下で生産された景観テキストとなって現れた。混合主義的な仏教の局地的形態を確立できたのは、ヒンズー教の万神のなかから特定の神々を選び出し、その神々に対して寺院を建設することで、また仏教とヒンズー教の物語に対して建築的隠喩を並置することでその神々を崇めたためである。

輝かしい過去の物語、すなわち高潔な英雄王がこの島 Lanka を治めていた時代に、この島は歴史上もっとも繁栄し勢力を誇ることになったという物語は、サンガによって著された偉大な歴史の年代記に記録

され、また王の儀礼的諸実践や景観設計のなかに組み込まれていた。栄光の過去に言及することで、キャンディーのアイデンティティは深く豊かにされ、このような英雄王の物語を規範として振る舞う王たちの支配が正当化された。後世のキャンディー人にとって、このようなテキストは背景にも口実にもなった。したがって、彼らによって生産された歴史的テキストと景観と儀礼との関係を概念的に説明するために、ここで間テキスト性という用語を用いることは有益なのである。

注意深く定義しなければ、言説と同じように、間テキスト性という用語もまたある種の望ましからざる理論的障害を付帯するかもしれない。文学理論の構造論的・決定論的ないくつかの定式化のなかで、それは自律したテキストの相互作用を表示するために用いられてきた。ここで私はその用語を、ストックが定義するように、そしてダンカンとダンカン (Duncan and Duncan, 1988) によって活用されてきたように、さまざまなテキストの間や、記述テキストや景観テキストのようにさまざまな型式のテキストの間の相互作用だけではなく、こうしたテキストとテキストに依拠してきた社会的諸実践との間の相互作用をも意味するものとして使うことだろう。

ストック (Stock, 1983; 1986) は、一組のテキストに与えられた共通の解釈を中心として成長するテキスト共同体 *textual communities* を研究してきた。彼は、このような共同体がしばしば読み書きのできない者たちによっておおかた構成されていると指摘する。彼らは一つのテキストもしくは一組のテキストに対してある権威者が示した読み方を擁護することで、その追隨者となっているのである。識字人口がわずかであったキャンディーの場合も、いくつかのテキスト共同体が発達していた。おのおのの共同体の構成員はみな、そのなかで口づてに伝えられてきた王位にかかわるある特定の言説に基づいて景観を読んでいた。また、そうした言説の一つ一つがよく知られているヒンズー教／仏教的テキストの伝統のうえに築かれていた。言いかえれば、こうした伝統的価値の伝達は、記述・口述テキストとともに景観テキストも必要としたという点で、間テキスト性だったのである。

ストック (Stock, 1989) は、「伝統的な」行動と

「伝統主義的な」行動とそれぞれ名づけるものとの間に重要な区別を見出していた。前者は慣習的なやり方への自覚のない執着であるのに対し、後者は歴史的な、さもなければ歴史的だとされている行動様式への自覚的な執着であり、それはしばしば、獲得したいと望む政治的優位性を見越してなされるものだった。キャンディー王国の後期には、歴史の重要性に対する強い感性が見られ、伝統主義的な行動が大々的に利用された。例えば、王は帝釈天や神々の都市にかかわるテキストの説明を模範にして、自覚しつつ自分自身や自らの都市を形づくった。彼はまた栄光の時代にこの島を治めた英雄王たちを模範として自分自身を形づくった。このようにして、記述テキストは王たちの振る舞いや彼の都市を解釈するために欠かせないコンテキストとなったのである。これから見ていくように、競合する種類のテキストが彼を打倒したいと願う人々たちによって対抗規範として参照された。

結論として、もし私たちが文化的諸体系のなかで景観が演じる能動的な役割を理解したいと望むなら、私たちは景観の意味作用と修辞法の両方に焦点を合わせるべきであると論じておこう。私たちはまた、言説間の抗争や景観の意味をめぐるいさかいにおいて、テキスト性や間テキスト性の役割を詳しく調べるべきである。こうした抗争やいさかいは、おそらく現実の物質的利害に基づいているものと思われるけれども、しばしば政治的過程において重要な役割を果たすのである。

引用文献

- Althusser, L. 1971. *Lenin and philosophy*. New York: Monthly Review Press. ルイ・アルチュセール著、西川長夫訳、1970、『レーニンと哲学』人文書院。
- Baker, K.M. 1985. Memory and practice: politics and the representation of the past in eighteenth-century France. *Representations*, 11: pp. 134-164.
- Barthes, R. 1979a. *The Eiffel Tower and other mythologies*, Trans. Howard, R. New York: Hill and Wang. ロラン・バルト著、宗左近・諸田和治訳、1997、『エッフェル塔』筑摩書房。
- Barthes, R. 1979b. From work to text. In *Textual strategies: perspectives in post-structural criticism*, ed. Harari, J.V. pp. 73-81. Ithaca: Cornell University

- Press.
- Barthes, R. 1987. *La lumière du sud-ouest*. In *Incidents*. Paris: Editions du Seuil. ロラン・バルト著, 沢崎浩平・萩原芳子訳, 1989, 『偶景』みすず書房。
- Baxandall, M. 1972. *Painting and experience in fifteenth century Florence*. Oxford: Oxford University Press.
- Belsey, C. 1980. *Critical practice*. London: Methuen.
- Brown, R. 1987. *Society as text: essays on rhetoric, reason, and reality*. Chicago: University of Chicago Press. リチャード・H.ブラウン著, 安江孝司・小林修一訳, 1989, 『テキストとしての社会—ポストモダンの社会像—』紀伊國屋書店。
- Butler, C. 1984. *Interpretation, deconstruction and ideology*. New York: Oxford University Press. クリストファー・バトラー著, 和田且・加藤弘和訳, 1987, 『解釈・ディコンストラクション—イデオロギー—現代文学理論入門—』芸立出版。
- Clifford, J. and Marcus, G.E. eds. 1986. *Writing culture: the poetics and politics of ethnography*. Berkeley: University of California Press. ジェイムズ・クリフォード, ジョージ・マーカス編, 春日直樹訳, 1996, 『文化を書く』紀伊國屋書店。
- Darnton, R. 1984. A bourgeois puts his world in order: the city as text. In *The great cat massacre and other episodes in French cultural history*, pp. 106-143. New York: Basic Books. ロバート・ダントントン著, 海保真夫・鷺見洋一訳, 1990, 『猫の大虐殺』岩波書店。
- De Certeau, M. 1985. Practices of space. In *On signs*, ed. Blonsky, M. pp. 122-145. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Duncan, J.S. 1980. The superorganic in American cultural geography. *Annals, Association of American Geographers*, 70: pp. 181-198.
- Duncan, J.S. and Duncan, N.G. 1988. (Re)Reading the landscape. *Environment and Planning D: Society and Space*, 6: pp. 117-126.
- Eagleton, T. 1983. *Literary theory: an introduction*. Minneapolis: University of Minnesota Press. T.イーグルトン著, 大橋洋一訳, 1997, 『文学とは何か—現代批評理論への招待—』岩波書店。
- Eco, U. 1986. *Semiotics and the philosophy of language*. Bloomington, Ind.: Indiana University Press. ウンベルト・エーコ著, 谷口勇訳, 1996, 『記号論と言語哲学』国文社。
- Fish, S. 1980. *Is there a text in this class?* Cambridge, Mass.: Harvard University Press. スタンリー・フィッシュ著, 小林昌夫訳, 1992, 『このクラスにテキストはありますか』みすず書房。
- Foucault, M. 1967. *Madness and civilization: a history of insanity in the age of reason*, Trans. Howard, R. London: Tavistock. ミシェル・フーコー著, 田村淑訳, 1975, 『狂気の歴史—古典主義時代における—』新潮社。
- Foucault, M. 1970. *The order of things*. New York: Random House. ミシェル・フーコー著, 渡辺一民・佐々木明訳, 『言葉と物—人文科学の考古学—』新潮社。
- Foucault, M. 1975. Film and popular memory: an interview with Michel Foucault, Trans. Jordin, M. *Radical Philosophy*, 11: pp. 24-29.
- Geertz, C. 1973. Deep play: notes on the Balinese cockfight. In *The interpretation of cultures*, pp. 412-454. New York: Basic Books. C.ギアーツ著, 吉田禎吾ほか訳, 1987, 『文化の解釈学 1・2』岩波書店。
- Geertz, C. 1980. *Negara: the theatre state in nineteenth century Bali*. Princeton: Princeton University Press. クリフォード・ギアーツ著, 小泉潤二訳, 1990, 『スガラ—19世紀バリの劇場国家—』みすず書房。
- Giddens, A. 1976. Hermeneutics, ethnomethodology, and problems of interpretive analysis. In *The uses of controversy in sociology*, ed. Coser, L. and Larsen, O.N. pp. 315-328. New York: Free Press.
- Hobsbawm, E.J. and Ranger, T. eds. 1983. *The invention of tradition*. Cambridge: Cambridge University Press. E.ホブズボウム, T.レンジャー編, 前川啓治・梶原景昭他訳, 1992, 『創られた伝統』紀伊國屋書店。
- Hodder, I. 1986. *Reading the past: current approaches in archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press. イアン・ホッダー著, 深澤百合子訳, 1997, 『過去を読む—考古学解釈のための最近の研究法—』フジインターナショナルプレス。
- Jameson, F. 1981. *The political unconscious: narrative as a socially symbolic act*. Ithaca: Cornell University Press. フレドリック・ジェイムソン著, 大橋洋一ほか訳, 1989, 『政治的無意識—社会的象徴行為としての物語—』平凡社。
- Jay, M. 1986. In the empire of the gaze: Foucault and the denigration of vision in twentieth century French thought. In *Foucault: a critical reader*, ed. Hoy, D.C. pp. 175-204. New York: Basil Blackwell. D.C.ホイ編, 椎名正博・椎名美智訳, 『フーコー—批判的読解—』1990, 国文社。
- LaCapra, D. 1983. Rethinking intellectual history and reading texts. In *Rethinking intellectual history: texts, contexts, and language*, pp. 23-71. Ithaca: Cornell University Press. ドミニク・ラカブラ著, 山本和平・内田正子・金井嘉彦訳, 1993, 『思想史再考—テキスト、コンテキスト、言語—』平凡社。
- Lewis, P. 1979. Axioms for reading the landscape: some guides to the American scene. In *The interpretation of ordinary landscapes*, ed. Meinig, D.W. pp. 11-32. New

- York: Oxford University Press.
- Mitchell, W.J.T. ed. 1980. *The language of images*. Chicago: University of Chicago Press.
- Mitchell, W.J.T. 1986. *Iconology: image, text, ideology*. Chicago: University of Chicago Press. W.J.T. ミッチェル著, 鈴木聡・藤巻明訳, 1992, 『イコロジー—イメージ・テキスト・イデオロギー—』勁草書房。
- Marcus, G. and Cushman, D. 1982. Ethnographies as texts. *Annual Review of Anthropology*, 2: pp. 25-69.
- Pratt, M.L. 1986. Scratches on the face of the country: or what Mr. Barrow saw in the land of the bushmen. In *"Race", writing, and difference*, ed. Gates, H.L. pp. 138-163. Chicago: University of Chicago Press.
- Ricoeur, P. 1974. The model of the text: meaningful action considered as a text. *Social Research*, 38: pp. 529-562.
- Said, E. 1983. *The world, the text, and the critic*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. エドワード・W. サイド著, 山形和美訳, 1995, 『世界・テキスト・批評家』法政大学出版局。
- Stock, B. 1983. *The implications of literacy: written language and models of interpretation in the eleventh and thirteenth centuries*. Princeton: Princeton University Press.
- Stock, B. 1984. Medieval literacy, linguistic theory, and social organization. *New Literary History*, 16: pp. 13-29.
- Stock, B. 1986. Texts, readers, and enacted narratives. *Visible Language*, 20: pp.194-301.
- Stock, B. 1988. Selections from the symposium on "literacy, reading, and power", Whitney Humanities Center, November 14, 1987. *Yale Journal of Criticism*, 2: pp. 193-232.
- Stock, B. 1989. Tradition and modernity: models from the past. In *Listening for the text*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Wagner, P.L. and Mikesell, M.M. 1962. General introduction: the themes of cultural geography. In *Readings in cultural geography*, pp. 1-24. Chicago: University of Chicago Press.
- White, H. 1978. *Tropics of discourse: essays in cultural criticism*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- White, H. 1982. Method and ideology in intellectual history: the case of Henry Adams. In *Modern European intellectual history: reappraisals and perspectives*, ed. LaCapra, D. and Kaplan, S. pp. 280-310. Ithaca: Cornell University Press.
- Williams, R. 1984. *The sociology of culture*. New York: Schocken Books.

※ 本稿では割愛したが, 原典には本文に 16 の注が付されている。それらは, ここに掲載した引用文献の他に, さらに広範な分野に及ぶ 96 件の参考文献を提示するものである。ダンカンが自らの景観研究法の核心を述べている本稿をより深く理解するためには, 原典の注にもお目通し願いたい。